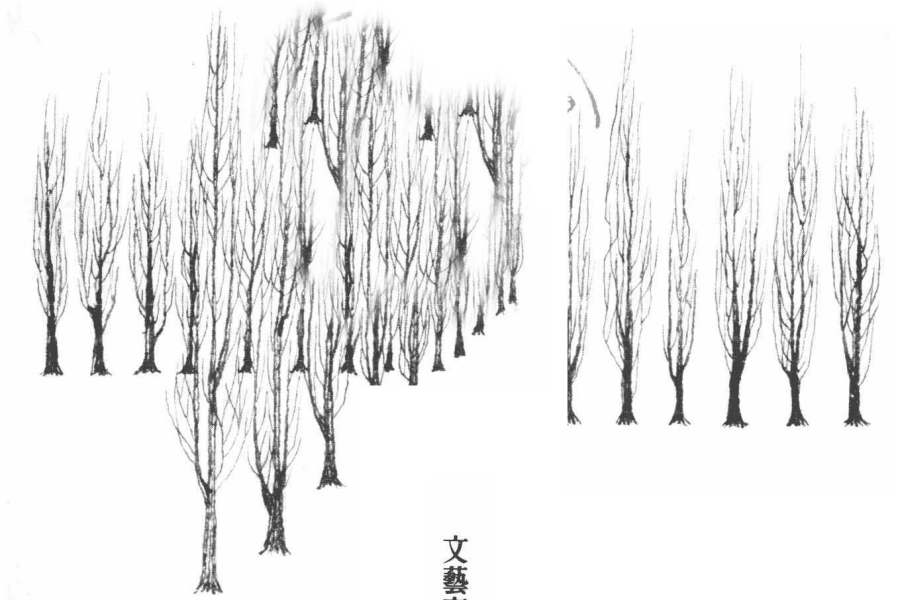
小さくとも命の花は

平岩弓枝



文藝春秋

小さくとも命の花は

昭和五十二年三月一日　第一刷

著者　平岩弓枝

発行者　樫原雅春

発行所　株式会社　文藝春秋

〒一〇二　東京都千代田区紀尾井町三

印刷所　凸版印刷

製本所　中島製本

万一、落丁乱丁の際はお取替えします

© Yumie Hiraiwa 1977　Printed in Japan

小さくとも命の花は

装幀　粟屋充

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1

小さな町を出はずれると、国道の左右はひろびろとした田園であった。
ぽつぽつ、田を打ち返す季節で、掘り返された黒土に早い春が光っていた。
黒土にも、陽の光にも、三津子はあふれるような幸せを想った。
(間違いなく、おめでたですね。二か月目に入ったところでしょう)
三津子が、はにかみながら告げた最終生理の日から指を折って、そう教えてくれた助産婦の青井ちかの声が、三津子の耳の奥で、まだ聞えている。
生れるのは十月の中旬の予定だという。
(少し、早すぎたかしら……)
三津子が上杉清の妻になったのは昨年の十二月二十一日であった。助産婦の計算だと、結婚して間もなく、みごもったことになる。そのことが、三津子はひどく恥ずかしかった。

見合結婚であったし、まだ新婚早々のことで、夫と受胎調節の話し合いをする機会がなかったのだ。といって、三津子が妊娠して困るような条件は、今のところ、なにもない筈であった。

むしろ、三日前の夜に、三津子が結婚以来、生理のないことを、ぎごちなく話した時には、

「ま、嫁に来た当座は狂うというけん。あてには出来んが、一ぺん、産婆さんにみてもらうが良か」

と満更でもない口ぶりであった。

それが、間違いなくみごもったのだと知らせたら、どんな顔をするだろうか。

三津子の胸は、この時、七分の期待と三分の不安が入りまじってふるえていた。

上杉燃料店はM町から一キロほどはなれた国道沿いにあった。

上杉清は次男坊である。彼の実家は、この附近一帯を持っている農家であり、長男の勇が農協へつとめ、まだ健在な両親が嫁の千代子と百姓をしている。

次男の彼は五年前、農地をわけてもらう代りに、国道沿いの七十坪の土地と、燃料店を出させてもらった。

三津子が店へ入ると、清は豆炭の注文を受けている最中だった。

土間で待っていると、自転車が止って、ストーブ用の灯油を一罐くれという客である。まだ石油ストーブが珍らしい頃であった。

三津子は灯油の罐を自分で自転車の荷台にくくりつけてやった。

「毎度どうも……ご苦労さんです……」

見送って店へ入ると、清がふりむいた。

「どうだった……やはり、狂うたとか……」
三津子は微笑して首をふった。どきりとしたのは、夫の顔色があっという間に変ったからである。
「三津子……間違いではなかったとか……」
「はあ……」
おろおろと三津子は、うなずいた。
「今、二か月ですと……」
清の視線があてもなく、三津子から逸れた。
一瞬、途方に暮れたような夫の表情に、三津子は足ががくがくした。
「あんた……出来たらいかんとね……」
「いや……」
あわてたように、夫が否定した。
「そげんことはなか……」
「でも……あんた……」
「そうときまったら、体ば大事にせんとな。重いものば持つでなか。自分一人の体ではなかとじゃけん……」
妻の眼を避けて、あたふたとリヤカーに豆炭を積んだ。
「町の大倉さんへ届けてくるけん……」
ペダルをふんで出て行く清を、三津子は不安の眼でみつめていた。
先刻までの夢は、けしとんでいた。

妊娠したことが、いけなかったのだろうかと思う。確かに妊娠を告げた時の、夫の変化にはその気配があった。

しかし、その後で、夫の口から出たのは、初産の妻を気づかう、夫らしい労わりの台詞であった。

上りがまちに、すわり込んで、三津子は、ぼんやりと店に並べてある石炭や煉炭、豆炭の袋の山を眺めていた。

三津子の実家は、上杉燃料店のあるM町から国鉄で三時間ばかり南のK市であった。

兄弟は四人だったが、中の兄二人が幼い時に病死しているので、長兄の重夫とは十歳も年がはなれていた。

そんなこともあって、県庁へつとめている父も、家で華道の師匠をしている母も、どちらかというと三津子をなかなか嫁に出したがらなかった。

三津子自身も、いわゆるおませの反対で高校時代も、級友の中にはボーイフレンドをみせびらかすグループもあったのに、生まじめ一方で道で男子の高校生から声をかけられても、返事もしないで通りすぎるほうだったし、両親も兄も、必要以上に彼女を子供扱いするふうがあった。

高校を出ると仲間の大半は就職したのに、彼女はどうしても両親が許さず、洋裁学校と和裁の個人教授へ通い、ついでに日曜日はガス会社で主催する料理教室へも行かされた。

もっとも、彼女自身、こうした稽古事は満更、きらいではなく、和裁と料理は殊に得意でもあって、かなり熱中した。そんなだったから、兄の重夫の妻が、結婚後も共稼ぎを続けていることもあって、食事の献立、家事全般は三津子が中心になってくりくりと働いていた。

兄夫婦に子供が生れた時も、産んだ当人の兄嫁よりも、三津子のほうが赤ん坊の世話がよくて、

おしめにしてもミルクにしても、母親顔まけの手ぎわでやってのけた。
「三津が居らんと、この家はどこになにがあるのかもわからんけん」
と父も母も、兄夫婦までが三津子をたよりにして、やがて気がついてみたら、彼女が二十四になっていたものである。
田舎のことで二十四は結婚適齢期のぎりぎりであった。
高校の同級生の大半が結婚していた。
今更のように両親があわて出して、誰彼となく縁談をたのんで廻ったりした。
そんな時、兄の重夫の妻であるてる子が実家できいて来た相手が上杉清だったのである。つまり、てる子と、清の兄上杉勇の妻が従姉妹同士ということから、この縁談が始ったものであった。
たまたま、K市の秋祭に勇の妻の千代子が実家帰りをしてくるのを、車で清が送ってくるというので、早速、それを利用して三津子と両親が、まず、それとなく清に逢った。
清の第一印象は悪くなかった。
口数こそ少なかったが、背が高く、がっしりした体つきで、落着いた感じがした。両親も、
「今時、珍らしいほど地道で、浮ついたところのない人じゃけん、きっと三津子を幸せにしてくれるばい」
「三津には、すぎたお人のようですたい」
と口をそろえたし、三津子も初対面から好感を持った。
ところが、いよいよ縁談ということになって、てる子があわて出した。よくよくきいてみたら、清に結婚の前歴があるというのである。

「そげんこと、ちっとも知らなかったですたい……はじめてと思ったばってん、三津子さんにどうかと思って話したのですけん……二度目と知っては、すすめられまっせん……」

と、てる子は蒼くなってあやまったが、両親はそれほど動じなかった。

結婚の前歴があっても、すでにその女とは三年も前に、きちんと別れたことだし、子供もないのなら、かまわんではないかというのである。

「それに、別れた理由が、清さんの浮気とでもいうのなら話にもならんばってん。きけば、その嫁さんが悪かけん離婚したとか。婿さんに罪はなかと」

と、好意的でさえあった。

両親にそういわれてみると、三津子も、清の離婚の前歴などたいしたことでないように思えたし、二度、三度と用事にかこつけてK市へやってくる清とデイトを続けるうちに、どうしてもこの人と結婚したいような気持に高まって行ってしまったのである。

K市の中心にあるお城の堀端を、映画をみての帰りに散歩しながら、三津子は自分から清に、愛を告白してしまった。

今しがた、みて来た純愛映画の余韻のせいもあったのか、清も亦、そんな三津子の愛にこたえて、力一杯、抱きしめてはじめての接吻をかわした。そのあとで、ぽつんと、

「ぼくは二度目だが、三津さんは初めてじゃけん、気の毒たい……」

と呟いた。三津子は、それだけで清の過去を理解する気になった。

それからは、むしろ、三津子が両親をせかし、せきたてて、暮も押しせまった十二月の二十一日に挙式することに決まったのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

新婚旅行は二日、阿蘇を越えて別府へ行って来た。
清は、三津子の両親が考えた通り、実直な働き者で、三津子にもやさしく、気のつく夫であった。
又、清の両親は、新婚夫婦の家から百メートルばかり入った場所に母屋があって長男夫婦と同居しているのであったが、三津子を殊の外、気に入って、馴れない土地へ嫁いで来たことだからと、なにかにつけて、いたわってくれていた。
その意味でも、三津子の新婚生活は幸せの条件がそろっていたようであったのだ。

2

上杉燃料店は夫婦二人きりの店であった。
注文があると、清はすぐにリヤカーで配達に出かける。その留守の店番は三津子の役目だった。
店においてある品は、石炭、豆炭、煉炭、炭、薪などだから、どれも重くかさばるものばかりであった。おまけに店全体が土間なので、上りがまちにおいた煉炭ストーブぐらいでは、足許が冷える。
「足腰ば冷やしたらいかんぞ」
と清は、三津子の妊娠を知った日から、殊に厳重に注意した。うっかり、三津子が素足でいようものなら、自分で毛糸の靴下をもって来て、はけという。
いささか神経質なくらいに、うるさかったが、三津子には、それが夫の愛情に思えて嬉しかった。
「重いものば持つな、土間には、なるべく出るな」

くどいように言い言いする清をみていると、三津子は妊娠を告げた時の彼の態度に不審を感じたのは、自分の思い過しかと思った。
（やっぱり、妊娠で神経質になっていたせいだわ……）
三津子は自分で自分にいいきかせた。
助産婦へ行って来た翌日の午後、姑のユキノがやって来た。清は店番をし、三津子は台所にいた。
「三津子さん、あなた、産婆さんに行ったとですか」
姑にいわれて、三津子は思わず店の夫をみた。昨夜、夫婦の話し合いで、三津子はすぐにも母屋の両親に知らせようといったのだが、夫は、
「まだ、ちっと早かけん、そのうち、折をみてわしが話すたい……」
まかせておけ、といったのである。三津子は夫が、新婚早々の妻の妊娠を両親に対して照れていると思った。
「そんなこと、いずれはわかることですけん。なるべく早くに話して下さいね」
三津子は念を押しておいたのだ。
「お母さん、そげんこと、どこから聞いたとですか」
清は土間をまわって母親に近づいた。心なしか、又、顔に僅かながら蒼味がさしている。
「今朝方、町役場のとこで、産婆の青井さんと逢うたらば、あっちから、このたびはおめでとうと挨拶ば、されたけん。こっちはなにも知らんでしょうが、返事に困ったとたい」
ユキノは若夫婦をみくらべた。
「それで、出来たというのは、ほんとかの」

正面からみつめられて、三津子は首筋まで赤くなった。
「そんなら、やっぱり、ほんとのことたい、そりゃあ、よかった……」
「お母さん……」
「なにも、かくすことはなか。お父さんも、清ももう三十じゃけん、一日も早く、子供ば欲しかもんじゃというてですたい。なんでかくしとったとね、可笑しかね……」
手放しでユキノは喜んだ。五月になったら戌の日をえらんで、なまくさけで祝いをしなければならないと、まだ、先の話をせっかちに指を折って数えたり、その祝いに呼ぶ親類の頭数まで並べたてている。
そんな姑をみて、三津子はやはり嬉しかった。
女の先輩として、つわりの話から分娩までの赤ん坊の仕度などについて、姑が一しきり話し込んで帰って行くと、三津子は店へ下りている夫に声をかけた。
「だから、早くに知らせてあげたら、よかったとね……あんなに喜んでお出でなさったけん……黙っていたとが悪かとね……」
三津子にしてみれば、夫婦共謀での小さな秘密を、早速、姑に感づかれてしまったことへの照れかくしの言葉だったが、清はうつむいて炭を切っていて、なんとも答えなかった。
妻にそむけた肩のあたりに、なにかひんやりとしたものがただよっているようで、三津子は、あわてて口をつぐんだ。
三津子の妊娠を、上杉家の母屋では、あげて喜んでくれた。舅の上杉利三は、用たしのついでがあったからと、N市まで出かけて安産のお守を受けて来てくれたりした。

「これで、ようやく清も父親になるとかね」
などと、畑仕事の帰りに寄って三津子に笑いかけたりする。
実家の母からも、妊娠を喜ぶ手紙が来た。なによりも、三津子がおどろいたのは、母の手紙の中に、
「これで、清さんの前の奥さんのことへの、気がかりがなくなった……」
という意味のことが書いてあった事である。
実際、妊娠ということがはっきりした時、三津子の心をかすめたのもそれであった。
清の別れた妻が、高岡初江といってN市に住んでいることは、結婚前に清の口からきいていた。
先妻との離別の理由を、清は、
「どうしても、性格が合わなかったけん」
と説明していたが、嫁いで来て、何故、初江が不縁になったかは、姑のユキノの折々に洩らす言葉のはしから、大体、想像が出来た。
高岡初江という女性は、清と結婚する前はN市の銀行につとめていたらしく、それが、姑のユキノに気に入られなかった遠因のようであった。
「なにがさて、職業婦人などというもんは、嫁にもらうものではなかと。稽古事もしておらんし、お針も出来ん、シャツのほころび一つ縫えんようでは先が思いやられるけん……」
ユキノは、そんな調子で息子の先妻を非難した。
「御飯の水加減もいい加減ですたい、清に結婚以来、まっとうな米の飯くわせたこともなかったとですよ。洗濯も掃除も好かん人ですけん。長続きする筈がなかと……」

三津子が返事のしようもないほど、悪口を並べておいて、その最後には必ず、
「それに引きかえ、三津子さんは、ほんとによか人で、清は幸せ者ですたい」
と、三津子の料理や針仕事の達者なことを賞めて行く。
姑のいうのが満更の嘘でもないと思われるのは、炭や薪を買いにくるM町の人までが、
「大きな声では言えんけど、前の奥さんは店ば出るときも、バーやキャバレーの女みたいな化粧ばして……どげん人かと思うたけん……」
などと、三津子にささやいたりするのでも知れた。
先妻の悪評判を耳にする度に、三津子は自分がその二の舞をふむまいと用心した。
そして、自分が主婦としての才能の点だけでも、先妻よりすぐれていることで、逢ったことのない高岡初江への優越感を持った。
それでも、夫への愛が深まるにつれて、三津子の心には、M町からバスでたった二時間半のN市に住んでいる先妻への意識が強くなった。
清と、かつて夫婦だったという女への、嫉妬である。
N市には、上杉燃料店で扱っている石炭会社の支店があるので、月に一度くらいの割で清はN市へ出かけて行く。その度に三津子は、心がさわいだ。勿論、夫がN市で高岡初江と逢うなどということは頭から否定してかかっているくせに、本能的な不安感がつきまとった。
まだ、みたことのない高岡初江という女が自分より美しいのか、性的魅力があるのだろうかなどと、まじめになって苦労したこともある。
そんな三津子の、先妻への不安が、妊娠と同時にきれいさっぱり消えてしまった。

先妻が産むことのなかった清の子を、自分がみごもったということへの、鮮やかな勝利感のためであった。

3

妊娠してから、三津子は毎日の化粧に気をつけるようにした。

どぎつい化粧はもともと、きらいだったし、したこともなかったが、妊娠前は素顔に、ほんの少し紅をあしらうだけで充分だったのが、最近は下地クリームの上に粉白粉か、固型白粉をはたき、その上に頬紅と口紅をつけるようにしていた。

まだ、お腹もそれほど目立ってはいなかったが、小柄な体型を考えて、早めにマタニティの用意も、自分の古い合オーバーをほどいてジャンパースカートを縫ったり、娘時代の夏のワンピースから、オーバーブラウスを裁つなどと、春から夏への用意もはじめた。

一方、生れてくる赤ん坊の肌着もガーゼやネルを買って、なるべく自分で縫うことにした。既製品は割高だし、出来具合も思うようなのがないのと、もともと、そうした細かな仕事を億劫がらない三津子の性質でもあった。

産着は実家から祝ってくれることになり、おしめにするようにと、古い浴衣なども、まとめて送って来た。そうした針仕事の他に、主婦としての家事、店番と、三津子の一日は結婚当初よりかなり忙しくなっていた。

「あんまり、根つめるでなか。一日や二日、掃除せんでもどうということもなかと、具合悪かった

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com